

音楽活動の中で、自分の思いをもって表現し、 他人とも意見を交わして、協働することを学ぶ

楽曲をどう演奏したいか、生徒がまず自分なりの思いをもち、それを「音楽」と「言葉」の両方で表現していく。さらにはほかの生徒の音楽表現との融合も目指していく。自己主張したうえでの協働に挑む、音楽の授業をご紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／赤堀正憲



音楽
豊田端吾先生

1969年生まれ。2002年より帯広三条高校に。合唱部顧問。2003年に同校合唱部は、全日本合唱コンクールで道内の高校では初の金賞に。その後も毎年全国大会に出場し、これまでに5回の金賞と3度の優勝を飾る。北海道教育委員会主催の研究會や研修の講師も務める。

**楽曲をどう演奏したいか
生徒一人ひとりが考える**

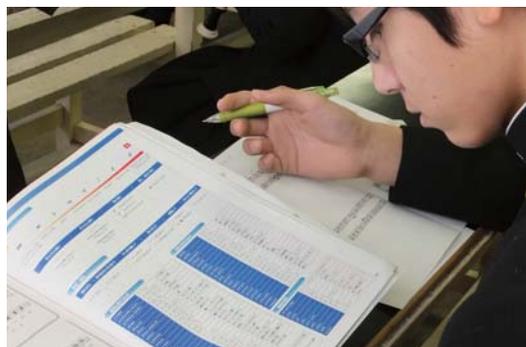
「今日はみんなで音楽の表現を考えたいんだけど、『音楽の表現』というのは、具体的に何を考えるんだろう?」

帯広三条高校の豊田先生は、音楽Iの授業で1年生にそう問いかけた。生徒たちからポツポツと意見が出て豊田先生がその声を拾う。強弱、音色、速度、発想力……。これまでに生徒たちは、リコーダーで『峠の我が家』を一通り吹けるくらいまで練習してきた。今日は2コマを使い、その演奏におおのが「自分なりの表現をつける」ことに挑戦するという。このパートはどれくらい音の強さや速さで吹こうか。このパートは「元気に」「軽やかに」などどんな発想で演奏しようか。そんな自分なりの思いを、手元の『峠の我が家』の楽譜に、教科書にある音楽記号や、言葉で書き込んで、その生徒ならではの音楽の表現を完成させるのだ。

どう演奏するかを自分で考え、判断し、考えたことを言葉にする。いうなれば、音楽を楽しみながら、思考力、判断力、言葉にする力を鍛える取り組みだ。

豊田先生はスライドで楽譜への書き込み例も示し、最後に注意点を言い添えた。「二つだけやっちゃいけないこと。頭の中だけで考えないで。必ずリコーダーを吹きながらやってほしいです」

演奏の試行錯誤をどこでするか生徒の自由。今の席でやってもいいし、移動して



教科書の一覧には、強弱記号、唱法・奏法記号(「滑らかに」など)、速度関係の単語、発想関係の単語(「愛らしく」など)がまとめられている。

友達の見も参考にしながら考えてもいいし、床に座りこんで考えてもいい。そのあいだ、豊田先生は巡回しながら、各生徒が考えた表現について質問をする。

「ここを速くしたいのはどうして?」
「ウキウキした感じにしたいんです」
「ほっ。すてきじゃない」

**自分の意図や感じたことを
相手に伝えて話し合う**

2コマ目の最初には、作成途中の数人の生徒の表現をみんなで演奏してみても試みた。じたことを言葉にすることも試みた。

「ここをクレッシェンド、音を強くしようと思っただけはなぜ?」

「強くするときれいになると思っただけではそれで吹いてみようか。…ほかの人はどう感じた? 言葉にしてみても」



HINT & TIPS

1 生徒が自分の思いを表現したいから練習して技能を身につける授業にする

歌や演奏に取り組むとき、豊田先生は作詞家や作曲家の思いなど楽曲の背景を伝えたくて、この曲をどう表現したいか生徒に考えさせる。そのうえで生徒たちが「思い描いた表現を実現させるにはどんな歌唱法や演奏テクニックが必要か」を考えて練習。目的が明確なので学習意欲が高まる。

2 何を思ったか、どう感じたかなど、思いを言葉にしてみることを生徒に促す

豊田先生は、質問や生徒同士の話し合いを通して、生徒が歌や演奏について「どんな意図でどう表現しようと思ったか」を言葉にし、音楽鑑賞時には「曲や歌詞をどう感じたか」を言葉に促している。鑑賞では「楽器編成が独特」「同じフレーズが何回もある」など、楽しめそうな視点を事前に教えることも。

3 安心できる空間にいると感じさせて生徒が言葉や音楽を発しやすくする

生徒の考えた音楽表現が自分の心地よいイメージとは違って、豊田先生は口に出さずに我慢(するとたいはいは生徒が自力でよりよい表現に向かうという)。また、自分の例や生徒の例を示すときは「これだけが正解ではない」と強調。押し付けを極力避けて、生徒の萎縮を招かないように気を配っている。

4 ペアやグループの音楽活動を通して生徒がお互いの違いを認め合う

ペアやグループの音楽活動で豊田先生がねらうのは、生徒それぞれが自分のよさを知り、ほかの人のよさも知り、違いを違いとして認めていくことだ。自分のやりたい表現と、ほかの人のやりたい表現の違いを理解し、認め合ったうえでどう折り合いをつけるかを考える。そうした協働の基本を生徒が学んでいく。

授業ができるまで

自分をうまく表現できない生徒のジレンマを感じた

豊田先生は、音楽の教員というよりもまず「先生になったか」そうだ。

「中学生のときにはやったドラマ『金八先生』の影響です(笑)。かたくなな子ども心を開いてしまう先生。自分もあんなふうになれたらいいなあ、と。吹奏楽部だったので目指すなら音楽の先生かなと、そこに音楽がくっついてきました」

はじめに赴任したのは、山あいの町の高校。当時は荒れていて、授業から抜け出す

生徒や、歌うのを拒否する生徒もいて、豊田先生はある意味望みどおり、音楽を教えるよりも前に、生徒と信頼関係を築くことの大切さを学んでいく。

「校内でも校外でも生徒とのかかわりを大事にし、つながりを深めていきました。生徒一人ひとりの特性を頭に入れたうえで、それぞれのよさを認めていることや、本気でかかわろうとしていることを、普段から意識的に伝える。そうすることで」

の先生の言うことは聞いてみよう』『素直に話してみよう』と思ってもらおう。口先でおべっかを言っても生徒は嗅ぎ分けますから、あくまでも本音がベース。その思いが生徒に届くよう、心をこめて伝えていきました」

最初は理解しがたかったこともある。些細なことでも机や壁を蹴ったり、暴力をふるう生徒たち。どうしてこうなるのか。豊田先生はその問いを考え続けた。

「わかったのは、思いを『言葉にできない』のが大きな要因であることです。周囲の言動に対して思うことがあっても、うまく表現できない。だから苛立って暴走する。自分の思いを表現する、言葉にするという経験が大事だと感じました」

転任後の今の高校では、暴走する生徒は少ない。だが、前任校の生徒が「応は感情を外に出していたのに対し、今の高校の生徒は気持ちを飲み込んでしまいがちで、自分を表現するのはやはり得意ではない。

豊田先生は授業で、音楽に対する「自分の思い」をもち、それを「歌や演奏で表現する」「言葉にする」という取り組みに力を入れるようになった。

「音楽を言葉で表現するなんてナンセンスだ」という意見もあります。ですが僕は、言葉にすることで音楽への考えが深まる面もあると考えています。言葉にするのを目的とせず、すばらしい音楽を生み出すための手段と考えれば、言語活動は音楽の営みにも有効だと思つのです」

教える立場から

授業のコーディネーターに

豊田先生は、初任時代からその地域に入り込むことも大事にしてきたが、このことも自分の教育観に変化をもたらしている。



生徒に表現の意図を尋ねるときは、「これおもしろいね」などと自分がそこを評価していることを先に伝えと、生徒も話しやすくなるそうだ。

く。地元のイベントやお店で親交を深めるなかで、豊田先生を応援してくれる人が増えた。生きた教材にふれさせたいと、なじみの寿司職人に講話を、琴を習っていた女性に日本音楽の単元で指導をお願いすると、不安ながらも引き受けてくれて、結果は生徒に大好評。感想をもらった講師側も喜んでくれて、学ぶ側にも教える側にも得るものがあることを実感した。

教科書や自分以外にも「学習素材」があると認識してからは、グループ学習など、生徒同士の学び合いも推進した。

教員が幅広い学習内容を一人で教えようとするのではなく、まわりの力を活用するという意識をもては、授業でできることはもっと広がるのではないかと。「教える立場」から「授業をトータルコーディネーターする立場」へ。豊田先生の教師像はそのように変わってきた。

生徒はこう変わる

表現したいことがあると
生徒の学習意欲も高まる



生徒たちと。2コマ連続のリコーダーの授業では、休み時間中も、演奏でどう表現するかを話し合う生徒たちの姿が見られた。

リコーダーの授業中、グループで話し合
いながら表現を考えていた女子生徒が、豊
田先生に質問をした場面があった。「同じ
音のまま、段々と音を小さくするにはど
う吹けばいいですか？」と。ただ息を弱め
るだけだと笛の音は下がるからだ。豊田
先生は「吹きながら口の開きを針金の太
さぐらうにせはめていくと、あまり音を下
げずに、小さくできるよ」とアドバイス。す
るとそのグループは、おのおのがその吹き
方を習得しようと練習に没頭した。

トすると、その表現をするために必要な
テクニックを学びたい、練習したい、という
意欲も高まるんですよ。そうではなく、先
生から「こう吹きたい」とテクニックだけ
教わると、子どもたちからすればそれを
覚える目的がないので、練習に身が入らな
いんですよ」

リコーダーの試験や最後の演奏会を迎
えるころには、生徒の奏でる音楽に明らか
な変化も見られるようになるという。

「メッセージが強くなります。前までは間
違えずに演奏しよう、としか考えていなか
ったのが、それも目指すけれど、たとえ音
を外したり、つかえたりしても、ここだけ
はこう演奏するんだ、という思いまで伝わ
ってくるようになるんです。合唱部の顧問
をしています。1年次の授業だけでなく、
部活動で3年間接する部員の子たちの変
化はよりはっきり見えますね。僕の前で何



合唱部の練習風景。全体の声合わせこそ豊田先生が指揮を執るが、部の
全体の運営やパートごとの練習は、生徒たち中心になって行っている。

もしやべれなかつた子が、思いを口にできる
ようになるだけでなく、「先生はこのよう
に歌つてと言いましたが、こうしたほうがい
いんじゃないでしょうか」と意見までくれ
るようになるんです。しかもそれが外れて
いない。そうやって自分で考えて表現しよ
うとしてくれるようになると、うれしいで
す」

**郷土芸能にも生徒が
主体的にかかわれるように**

豊田先生は今後、生徒が表現を考える
授業を、郷土芸能や地域の人も結びつ
けて行いたいそう。例えば、帯広地方に
伝わる「赤い山青い山白い山」という子守
唄。北原白秋が絶賛し、彼の童謡「赤い鳥
小鳥」のもと歌にもなったもので、その歌
詞は帯広の風土を知らないとい十分に理解
できない。豊田先生は、市内の郷土研究家
を授業に招き、歌詞の理解を手助けして
もらったうえで、生徒たちがふるさとの子
守唄をどのように歌いたいか考える、とい
う構想も温めている。

もちろん、そのように自分たちで表現
を考えるのは簡単なことではない。実際、
生徒たちからも「難しい」「先生の質問に
どう答えればいいのか詰まることもある」と
いう声が聞かれた。けれども、本人たちは
授業そのものは嫌ではないそう。男子
生徒は言う。

「難しいですけど、楽しいです。自分を
出せるので」



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	<p>音楽を形づくる要素についての論理</p> <ul style="list-style-type: none"> 旋律・強弱・速度、テクスチャなど学習指導要領に規定されたもの。 <p>楽曲の成立の背景にあるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> その楽曲が成立した社会的・歴史的背景。 <p>音楽文化(音楽と生活とのかわり)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生きるうえで不可欠なものとして、音楽が生活と深くかかわりながら発達してきたその文化。 	<p>音楽を形づくる要素を知覚する力</p> <ul style="list-style-type: none"> 旋律・強弱・速度の違いによる変化などを感じる。 <p>相手の意図を感じる力(他者理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 歌詞や楽譜、演奏から相手の意図を考える。 <p>思いを言葉にする力(自己理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを言葉にするという訓練を積む。 <p>思いを音楽で表現する力</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを、歌や楽器で表現する。 	<p>自分を表現してみようとする意欲</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽や言葉による表現を他者に受け止めてもらえる体験を生徒が積むことで、「自分が思ったことを表現してみよう」とする意欲を高める。 <p>違いの違いとして認めていく姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者の作曲や演奏の意図を考えるなかで、自分と違う価値観があることを生徒が認識。好みでなくともそれもありだと認められる心を養う。
その力が将来にどう生きる?	<p>多様なシーンで音楽を活用できる</p> <ul style="list-style-type: none"> 気持ちを高めたいときや沈めたいとき、みんなの気持ちをまとめたいときなど、その場面に合った音楽は何かを考えて選んでいける。 <p>人を楽しませたり癒したりできる</p> <ul style="list-style-type: none"> 知識をもとに場面に応じた音楽を創作または選ぶことで、エンタメや医療福祉、祭礼などの仕事で人を楽しませたり癒したりしていける。 	<p>状況判断や意思疎通がしやすくなる</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章や会話のトーンから、相手の気持ちを察知する力が高まる。また、自分の感じたことを言葉にして整理して現状を理解しやすくなる。 仕事相手などに思いを明確に伝えられる。 <p>人生をより豊かに楽しめるようになる</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽表現・鑑賞をより楽しめるようになり、喜怒哀楽など人間の大事な感情が呼び覚まされる。 	<p>仕事などで自己主張ができる</p> <ul style="list-style-type: none"> やりたいことや気になったことを、自分のなかだけに溜め込まずに外にも発信でき、それによって周囲にも働きかけができる。 <p>他人と協働していく関係を築ける</p> <ul style="list-style-type: none"> 異なる価値観の人がいても完全に拒否はせず、その価値観も認めようとして、どう折り合えるかを考えて関係を構築していける。